



眼下に広がる美しい丸山千枚田

Special Features / Engineering's Heritage V Creating Japan

# ふるさとの原風景「丸山千枚田」

## 三重県熊野市紀和町



日本工営株式会社/中央研究所/総合技術開発部  
藤澤久子  
FUJISAWA Hisako

特集  
土木遺産V  
日本の国づくりの心

### 1—ふるさとの原風景

丸山千枚田は、紀伊山地の山中、三重県南端近くの熊野市紀和町にある。千枚田のある丸山地区は、町の東部にある白倉山（標高736m）の山麓に位置しており、鬱蒼とした杉林の続く山中を行くと、暗い道の切れ間から、眼下に広がる美しい棚田を見ることができる。

「耕して天に至る」と形容される棚田の風景は、見る人を感動させるふるさとの原風景でもある。その維持・保全の取り組みを積極的に評価し、農業農村に対する理解を深めるため、1999年7月、農林水産省により「日本の棚田百選」として、117市町村の134箇所及ぶ棚田が認定された。気候的な制約もあることから、棚田は西日本に多く分布しており、枚数の多さから千枚田と呼ばれているものもあるが、実際に千枚以上の田を持つ棚田は、現時点ではわずか11箇所である。中でも紀和町丸山の千枚田は、その名の通り千を超え、名実ともに千枚田と呼ぶに相応しい日本最大規模の棚田であり、その壮大さを見る者を圧倒する。

この景観が形成されるまでの間、山中の開墾作業は並々ならぬ労苦があったはずである。なぜ、小さな山村であるこの地に、日本最大規模を擁する棚田が造られたのだろうか。

### 2—鉱山資源の町

紀和町は、2005年11月に合併した熊野市の南西部、瀨峡、瀨八丁で知られる北山川、熊野川を隔てて和歌山県と奈良県の県境に位置している。町の総面積の約90%が山林で占められ、耕地の大部分は山の斜面に拓かれている。豊かな自然と温暖な気候に恵まれ、年平均気温16℃、年間降水量は約3,000mmと多雨地帯で、積雪はほとんどなく、年数回降ったとしてもすぐに消えてしまう程度である。一方、気温の日較差は大きく、海岸部と比べて寒暖の差は大きい。

紀伊半島の地盤は火成岩類が広く分布しており、丸山は流紋岩地帯に位置している。これらが母体となって、銅を中心とした金属鉱床が紀和町の各地に存在してお



写真1—立て札はオーナー棚田の証



写真2—鎮座する大石

り、奈良の大仏が建立されたときに、この地から大量の銅が供出されたという説があるなど、古くから鉱山の歴史がある。昭和初期には、鉱業の発展により人口が一人を超え、鉱山は町を支える重要な資源であった。

### 3—石垣づくりの知恵、職人の土地柄

丸山千枚田は、標高110～290mの傾斜約14度の西向斜面に雛壇状に100段近く展開しており、石積みの畦畔の高さは平均1.1m、形態は等高線型区画である。

石積みのほとんどは野面石の乱層積みである。野面石とは山野に転がっている自然石のことで、乱層積みとは不定形の石を巧みに組み合わせながら堅固に積む手法である。丸山の畦造りには、身近に手に入る石はすべて利用されており、野面石は、積むのに不都合があれば砕き、形と大きさが不揃いでも、構わずに組み合わせられて積まれている。大きな岩が在るところは、そのままかあるいは避けて田を作ってきたため、千枚田のいたるところに不自然に大きな石が埋まっている。中でも「大石」と呼ばれる巨石は圧巻である。

丸山千枚田の造りは、総石垣積み、下部が石積みで上部は土坡、土坡のみの3種類がある。総石垣積みの棚田は急な勾配のある場所に多く、上部土坡と土坡のみの仕上げが多いのは、千枚田の下半分の棚田である。これらの石垣は、動力機械のない古い時代に村人たちがコツコツと作り続けてきたものである。

千枚田の一角に丸山神社がある。石凝姥命が祀られており、この神様は鍛冶の祖、あるいは石の神といわれている。棚田の中に「石」の神である。丸山にこの神様を祀った理由は明らかではないが、棚田の石垣、熊野古道の石畳、鉱山の発展を考えると、むしろ石工職人が多い土地柄だったことが想像され、千枚田の石垣づくりにその知恵が活かされた可能性は高い。

### 4—田んぼを潤す水の仕掛け

丸山千枚田は、日本一の多雨地域という恵まれた環境にあり、棚田を潤す水は、丸山川から堰を設けて取水するほか、集落内から湧き出す六筋の系統を水源としている。各水源から用水路で導かれた水は、棚田群の最



写真3—形も大きさも様々な丸山の石積み



写真4—千枚田を見守る丸山神社



写真5—沢水を暖める工夫の副水路



■写真6—水源のひとつの丸山川



■写真7—集落内から湧き出す水源



■写真8—わずか3株！丸山で一番小さい田んぼ

### 5— 棚田の多面的機能

棚田の機能は、米をつくる生産の場としての役割の他に、多面性を有するといわれる。その多面性とは、第一に保水・洪水調節・土壌侵食防止などの国土・環境保全、第二に両生類・魚類・昆虫・鳥類・哺乳動物など多様で独自性を持った生態系保全の役割、さらに日本人の原風景といわれる棚田景観の文化的価値などである。

中でも国土・環境保全の役割については近年注目されている。棚田は地すべり地帯に開拓されたものが多く、耕作放棄により再び地すべりが発生したという報告もある。粘土質の田は水が入らない年が1年でもあると、深いひび割れができ、それまで浸透しなかった地中深くに水が浸透するようになる。そこに降雨・融雪による地下水の上昇や、地震・火山活動による斜面形状の変化などが起こると、斜面上の土塊が不安定化して地すべりが発生するのである。

耕作放棄された田にもぐらが小さな穴を開け、これがたちまち大きな陥没になったという話を聞いた。棚田に水を引き入れる、溜める、田を耕し、畦畔を整備するという、米を作るために行う当たり前のことが、国土保全につながっている。

棚田がもつ役割は生産の場としてが第一であり、国土保全機能については、二次的な効果であろうと考えられる。しかしながら、耕作放棄された田は荒廃の進行が早く、洪水や地すべりなどを引き起こす可能性を持っていることを心に留める必要がある。



■写真9—うねるように折り重なる田



■写真10—稲刈りの真っ最中



■写真11—鮮やかな赤色が映えるヒガンバナ

### 6— 千枚田存亡の危機

丸山地区の棚田がいつ頃拓かれたかは不明であるが、すでに17世紀初頭の慶長年間には存在していたことを示す史料(検地帳)が残っている。

水田の枚数は当時2,240枚(約7.1ha)あったとの記録があり、明治時代には2,400枚(約11.3ha)以上まで広がった。その後昭和30年代までは、ほぼそのままの姿がとどめられていたが、1978年(昭和53年)、町の基幹産業である鉱山が閉山したことにより急激に過疎化が進んだ。後継者不足と高齢化等により、作業効率のきわめて悪い棚田は放棄されるようになり、荒廃地が増加してきた。丸山千枚田は、第2次世界大戦後の食糧難の時代でも2,400枚以上あったものが、1993年には約530枚(3.0ha)まで減少し、存亡の危機にさらされた。

### 7— 復田と保全の取り組み

このような危機的状況に、「先祖から受け継いだ千枚田を復元したい」という地元住民の熱意と、「千枚田を復元することで、地域活性化につなげたい」とする行政の思いが一致し、1993年から一旦放棄された棚田の復田に取り組み始めた。丸山地区の農家31戸で結成された千枚田保存会は、翌年には全国でも初めての「紀和町丸山千枚田条例」を制定した。1996年からは千枚田オーナー制度にも取り組み、さらに1999年からは丸山千枚田を守る会の会員も募集している。千枚田オーナー制度は、一般の人に1口3万円で1年間、約100m<sup>2</sup>の水田のオーナーになってもらい、稲作に参加してもらう。オーナーには、千枚田でとれた米と、年2回季節の野菜が送付される。

復田開始からわずか4年の間に810枚(2.4ha)が順次復田され、地元農家の耕作枚数と合わせて1,340枚(約7.0ha)が耕作され、現在もこの枚数を維持している。

### 8— 受け継がれる誇り

千枚田復元の取り組みを契機に棚田は全国的にも注目を浴び始め、棚田百選の認定、棚田学会の設立、全国棚田(千枚田)サミットの開催のほか、全国で棚田のネッ



■写真12—豊かに実る稲穂

トワークが広がっている。

棚田は美しい。しかし、そこにはその美しさを守る人々の苦労がある。一枚の田は大きい方が効率が良く、と今の私たちは考えがちである。しかし、大きな田を作るには、高い石垣や畦畔が必要で、相当の労力が要る。だから丸山の棚田は小さく、低い石垣が多い。そうやって作った一枚一枚の田が、丸山千枚田という美しい景観を生み出している。

丸山の人々は、生活のために田んぼを作った。『棚田の謎』には「丸山の人口増加は日本の人口変動に連動しており、日本中の村々で新田開発が行われた同時期に、丸山は大きな開拓が行われ、その反映として戸数と人口が増えたのであろう」とある。田を拓げ、定住する人々が増え、さらに田を拓げていった。全国的な新田開発の拡がりの中で、丸山千枚田も少しずつ、少しずつ大きくなっていったのであろう。そこには、銅を中心とした豊富な資源を活用するための鉱山技術、熊野古道の石畳に見られる石積みの技術など、この地独自の技術を持つ人々の知恵が活かされていたのかもしれない。しかし、現在この地に日本最大規模の棚田があるのは、何世代にもわたる努力の結晶を、丸山の人々が守り続けてきたからではないだろうか。

この景観を維持する人々の高齢化は進んでいるが、先人から受け継いだ誇りとともに、未来にあり続けることを願ってやまない。

#### <参考資料>

- 1) 「丸山千枚田」資料 財団法人紀和町ふるさと公社
- 2) 「紀和町史 上・下・別巻」三重県南牟婁郡紀和町 1991年・93年・94年
- 3) 「日本の棚田 一保全への取り組み」中島峰広 1999年2月 古今書院
- 4) 「棚田の謎 千枚田はどうしてできたのか」田村善次郎・TEM研究所 2003年3月 OM出版

#### <取材協力・資料提供>

- 1) 熊野市紀和総合支所 地域振興課
- 2) 財団法人 紀和町ふるさと公社

(写真提供：P16上、写真6、10、小澤宏二)

- 写真1、12、加藤英紀  
写真2、3、5、7、8、11、筆者  
写真4、9、13、塚本敏行)



■写真13—食した感想「うまい！」